2年間を通して感じたこと

2年間を通して、生徒達にとって居心地の良い場所をつくろうとしていたら、いつの間にかそこが自分にとっても居心地の良い場所になっていました。鶴見でのFWを通して、自分と異なる誰かと関わるということは(大学生から生徒達への)一方的な→ではなく、矢印が双方向を向いているものだということを強く感じました。特に受験勉強をみていた先生と生徒的な関係であった1年目と比べて、もっと対等な立場であった2年目は私たちが生徒達をよく観察し何かを感じていたのと同じように、生徒達もまた私のことを観て何かを感じていたように思います。私は自分自身が外国にルーツを持っているため比較的ラウンジの生徒達に「共感」できることは多かったものの、中には容易に「共感」できないこともありました。こうしたものに対して「想像」して、それを学生内で共有してまた「想像」する。これを繰り返す中で、人の機微に触れることが前より少しだけできるようになった気がしています。

ここで得たのは経験だけでなく、人と人とのつながりです。7期の活動は本年度を以て終了しますが、今後もラウンジのみんなとつながり続け、頼り・頼られる関係でありたいと思っています。

----------鶴見よる教室の忘れられない出来事たち----------

イベント事

BBQ、スポッチャ、合宿、横須賀、クリスマス会。昨年と比べて多くのイベントを実施しました。その度に普段のラウンジでは見ることのない、礼儀正しい一面であったり想いっきり頼れる一面など新しい面を垣間みることができました。

2015年度のラウンジでの日々

毎回トランプやUNOをして、おしゃべりをして、昨年の「受験勉強」に比べると一見何をしていると説明しづらい活動内容でした。でも不思議と生徒達は毎週集まって来て、私も毎週行きたくなっていました。何をするかが問題なのではなく、ラウンジに行って同じ時間を共有して、お互いを知り合うというのが目的であると今は考えています。

ハプニング

大きいもので言えば家出騒動、他にもカップルの問題や入院など生徒それぞれが悩みを抱えていました。日常の生活の中で私たちが育んでいるものが何なのか、こうして何かがあった時にわかるものなんだなと強く感じました。あたり前のように生徒が私達を頼ってくれること、学生があたり前のように心の底から生徒を心配すること。これが私たちが培って来たものなのだと胸を張って言えます。

合宿

初めて生徒達と合同での合宿。合宿係としては夏休みに遠出する予定のない生徒達に夏休みの思い出を作ってあげたかったです。これは、私が子どもの頃長期休みの度、帰省する周りの友人達がうらやましくて、寂しかったからかもしれません。裏目標は、4年生になってからあまりラウンジに来ていない大学生に生徒達と出会ってもらうことでした。

自分たちの手で場をつくることは難しく、だからこそ2年間試行錯誤しながら成長することができました。
一緒に鶴見で過ごした塩原ゼミのみんな、高校生のみんな、サポートしてくださった塩原先生、富本さん、鈴木健さん
国際交流ラウンジの皆様に感謝しています。
本当にありがとうございました！

7期秦理江

鶴見よる教室とは

有賀　彩織

夜教室が始まってもう二年以上たった今でも、夜教室って何をやっているの？と聞かれたとき、私はいまだに何と答えたら良いか分からない。　“外国にルーツを持つ子供たちに勉強を教えたり、居場所づくりをしていて…”と少し曖昧に答える。居場所づくりなんて大それたことを言っていても、実際にはその日による教室に顔を出してくれた子供たちとおしゃべりをしたり、たまに勉強するだけ。でも、その時間を積み重ねていくことがお互いにとって大切なのだと思う。週に一度、お互いに近況を話し合って、相談をし合う。彼らと私たちの関係を一言で表すとしたら、“友達”が一番しっくりくる。私はこの活動をフィールドワークと呼ぶことにも、もちろん違和感がある。

子供たちと接していて、一番よかったなと思えるのは私のことを名前で呼んでくれる瞬間である。下の名前で呼んでもらえた時に初めて、彼らにゼミ生の一員としてではなく、友人として認めてもらえたような気持ちになる。そんな友人と接する、鶴見の時間の中で私が得られたものを挙げるとすれば、それは、“表面には出ることのなかった相手の気持ちをくみとること”である。あの子のこの言葉の裏にはどんな気持ちがあったんだろう、前はこう言っていたけど、本当に大丈夫なんだろうか。そんな風に相手のことを考える時間が私にとってはとても大切で、それはある程度の時間をかけて積み上げてきたものがあるからこそできることなのだと思っている。

塩原良和研究会入ゼミ課題において私は、“外国にルーツを持つ子供たちと向き合うことで、多文化共生実現に向けて自分なりにできることは何なのか、その答えを見つけたい”と述べていた。自分にとってのそのフィールドは、現在の鶴見よる教室そのものであり、２年間鶴見で過ごした今では、その答えもほんの少しだけ見つかったような気がする。

『いつも変わらない場所』

7 期　岩田　陽介

左の写真は、高校生との１泊２日の旅行の時。右の写真は、クリスマス会の時。

昨年度の受験支援をメインに行い、毎週のように通っていたよる教室と比べて今年は数えるほどしか参加できていなかった。新しく交流し始めた高校生とは旅行で交流を深めることができたと思う。今回のプロジェクトで新しい高校生と出会った際に付いたことは、自分自身が身構えるスイッチが入らなかったこと。昨年度の活動のおかげで、すんなりと活動に入ることができた。それは去年と比べた自分の変化であるが、同時に高校生達が良い雰囲気を作り出しているからでもあった。今回のよる教室は、作られた居場所というよりも、自然と人が集まってみんなの居場所となっているように感じることができた。そして、高校生ひとり一人が自分をさらけ出して一生懸命に生きている魅力的な人であったと思う。

いつ行っても変わらない場所、雰囲気、ひと。2 年間たくさん悩んで、色々考えさせられて、充実した時間を過ごす事ができた活動だった。

最後に、2 年間を通して活動を支えてくれた FW コーディネーターの方々、ありがとう、そしてお疲れさま。

鶴見の高校生たち、彼彼女らの将来が輝かしいものになることを願っています。

また、会いましょう。

Friends　Project 報告書

松坂くるみ

今年度も、つるみよる教室は、本当にいろいろなことがあった。いろいろという言葉では何も伝わらないのだが、本当にいろいろとしか言いようのないほどたくさんのことがあった。一つ一つをあげればきりがなく、月並みな表現ではあるが、「楽しいこともつらいこともあった」といったところだろうか。それでもトータルでいえば、楽しいことのほうが多く、また、楽しい・つらいでは簡単に割り切れないことがあったのも事実である。

受験勉強を中心としていた去年の活動とは違った自由な環境のなかで、今年度は、私自身がよる教室での居場所を探すところから始まったように思う。むしろ、高校生たちにあたたかく迎えてもらい、仲間にしてもらったと今でも思っている。高校生たちの恋バナを聞いたり、UNO をしたり、ただダラダラと過ごしている時間が多かったが、そんな他愛もないふれあいのなかで、少しずつ私とよる教室のメンバーとの距離は縮まってきたと思っている。就職と進学のはざまで揺れたり、自分の生い立ちについて語ってくれたりと、じっくり話す機会も徐々に増えていった。心残りなのは、そういった個としての深い対話をできた高校生が限られてしまったことだ。しかし、あの空間に何を求めてきているのかは高校生一人ひとり異なっているのだろうし、それはそれでよかったのかなとも感じている。

また、昨年度まで中学生として一緒に勉強していたメンバーが高校生になり、新たな生活に踏み出していくのを見ているのは、なんだか不思議な気持ちだった。アルバイトを始めたり、お化粧を始めたり、たった一年間でここまで人は大人になっていくのだなと感じさせられた。忙しい中でも顔を出し続けてくれる子も多く、みんなにとって少しでもよる教室が意味のある場所になっていてくれればいいなと日々思っている。教室に来られる時間が少なくなってしまった分、個人的に連絡をくれる子が増えたのも去年との変化だった。学校に提出する書類でわからないところを LINE してくれる子もいれば、昨日のデートがうまくいかなかった話を LINE してくれる子もいた。いずれにせよ子供たちにとって少しは頼れる存在になれたのだろうか。

そして実は、なによりも、私自身が高校生たちに支えられてきた。２０１６年という年明けからまもなく、ある高校生が「さみしい時も楽しい時もくるみがいつも私の話を聞いてくれて本当にありがとう。くるみ社会がんばってね！ずっと応援してるから！」という LINE をくれた。このときはじめて、私がどれだけこの子達に支えられここまで来たかを感じた。新年の初泣だった。彼女が言ってくれているように、社会にでてからも私は高校生とずっと友達でいたいと思っている。また、このような素敵な出会いと機会を与えてくださった塩原先生、就職活動で大変ななか取り仕切ってきてくれた FWC のみんなに感謝したい。

Friend Project 報告書

7 期　根本昌輝

2015 年度は、「支援」のあり方について考えさせられた年であった。大きな理由としては、課外活動で関わっていた学習支援の活動をいったん休止したことにより、ゼミのフィールドワーク活動への参加頻度が高くなったことが挙げられる。今年度は、鶴見の「よる教室」に加えて、市立川崎高校の「ふらっとカフェ」にも積極的に参加した。高校生たちと関わる中で実感したことは、「支援」というニュアンスの難しさである。今まで学習支援活動を行ってきて、当たり前のように“困難を抱える子どもに対して支援をする必要がある”と口にしてきたが、少なくとも居場所づくりの場において、そういった気持ちで臨むことは好ましくないと感じた。最後の授業でも少し議論になっていたが、居場所がある状態とは、おそらく何かあったときに誰かに相談できて、誰かが応じてくれるような状態であって、その根底には何か「安心」のようなものがなければならないのだと思う。そして、そういう「安心」をつくるためには、できるだけ上から目線の「支援」というニュアンスは取り除いたうえで、相手と接しなくてはならないのだと思う。ここで、先生がフィールドワークのコンセプトとしてあえて「社会調査」的にならないようにしていると説明されていたことの意味がようやく理解できたように思う。本当に必要な「支援」を届けるためには、「支援」のもつ支配的・暴力的なニュアンスをできるだけ取り除く必要があると感じた。

Friends project 報告書　永岡拳治

Q：この活動を二文字で表すと？
A：対話。自身はオーストラリアに一年間留学に行っていたため残りの一年間しか活動できなかった。しかし、徐々に高校生と対話できるようになり、彼らのことを知ることができた。このゼミに入るまであまり対話という言葉を意識してこなかった。ゼミに入ってから授業で何度もこの二文字を聞いて意識するようになり、この活動を通して自分なりに対話を実践できたと思う。(対話を「実践」というとなんとなくつっこまれそうなのだが・・・)

Q：今だから言えること
A：正直自分が何か有益なことを成し遂げたかというと何も成し遂げていない。楽しい空間ではあるが、自身が何か課題を解決したかというとそうでもないと思っている。それでもこの活動をやってよかったなと思うのは、①社会に関する関心が深まった②積極的に自分から様々なコミュニティに出ていくことで学びがあると知れた③結局大事なのは行動だなと気付いた、の三つではないかと今思う。
①社会に関する関心が深まったと言う点について、人間は様々なコミュニティに所属しているが、コミュニティから排除されてしまう人々がいる。いるということを知るだけではなく、自分自身でも日頃からその人たちについて考えるようになった。この活動で共生の場を作り出しているように、他のシチュエーションで排除されているような人にも場を提供する必要があるのではと思うようになり、結果的に様々な社会が抱える問題に関心を持つようになった。
②積極的に自分から様々なコミュニティに出ていくことで学びがあると知れたと言う点について、もちろんこの活動だけではないが、様々なバックグラウンドを持つ人と関わることで自分も学ぶことができた。例えば、高校生との会話で自分と同じ考えを持つところがあったり、異なる意見を得られたりなど。最近では、ある高校生の話し方から、自分の能力を認めてほしいんだな、とわかるようになり、その時に素直に認めてあげるのが大事で、そうすると彼らの自信にも繋がるのかな、といった気づきがあったりする。いろんなコミュニティに属することで学ぶことができ、自身の成長につながるので積極的に出ていきたい。
③結局大事なのは行動なんだなと気付いた、と言う点は、一年間留学に行っていたので、最初この活動が面倒だと思った。しかし、理由は後からでいいや、という感覚でまず行ってみようと思い、行き続けると学びがあった。「真面目な活動だし、俺が今からやるのはなんか違うな」と思って辞めるのではなく、「まあノリで行ってみるか！」という姿勢は大事。結局自分が楽しいと思えることは今までの過去の経験に基づいた楽しさであるから、限られている。もちろん、やってみてつまらないことや意味ないなと思うこともあると思うがそれはその時。ある程度考えて（ノリだけはもちろんダメだが)、行動することが大事。思

考<行動の姿勢で行きたい。

鶴見の仲間たち

7 期　永田さくや

私は毎週土曜日楽しみにしていることがある。それは、鶴見にいる仲間たちに会いに行くことだ。昨年度行った中学生の受験勉強のお手伝いの活動と、今年度行っている高校生の居場所作りの活動は異なる点が多い。一番の違いは、昨年度は私たち大学生が一方的に生徒たちに勉強を教えることが多かったのに対し、今年は高校生たちと大学生で、また高校生同士で双方向のコミュニケーションが盛んに行われていることだ。

ラウンジのいつもの教室に入ると、N は最近気になっているかわいい女の子と出かけた話、E は大学でコンピューターエンジニアリングを学びたいという話、C は英語の資格に向けて一生懸命勉強しているという話、など、私に様々な話を持ちかけてくれる。私はこのような高校生たちの話を聞き、一緒にわくわくしたり、一緒に悩んだりすることが楽しくてたまらない。

また、今年度は高校生と大学生でお出かけを何度か行っている。キャンプ、スポッチャ、バーベキュー、横須賀散策、クリスマスパーティーといった教室の外でのアクティビティーでは、普段見ることのできない高校生の顔を見ることができる。スケートができない C に付きっきりで見てあげる M の姿や、F のご両親に丁寧に挨拶する R の様子は、これらのお出かけを通して見ることのできた高校生の新たな一面である。

鶴見のラウンジは高校生たちの居場所でもあるが、同時に私の大切な居場所でもある。大学を卒業しても、時間を作って大切な仲間たちと再会できるこの居場所に戻りたいと思う。

Friends Project 報告書

2015 年度を振り返ると、やはり就職活動の印象が濃い 1 年であったと振り返る。
言い方を変えると、就職活動に飲まれ、その他の思い出が薄くなってしまう 1 年であった。
その中でも比較的いい思い出として残っているのが、毎週火曜、同じクラスで仲間に会える時間であり、効率や合理性だけが必要とされる就職活動では役に立たないであろうことを話し合う時間だった。
そして、その中で“無駄”は何一つなかったと改めて思えたのは、ゼミ最後の授業を受けたときのことだった。最後の授業で塩原先生の口から紡ぎ出された言葉には、私たち学生を想う気持ちが込められていた。
この回で学んだことを忘れぬよう、この場で今一度振り返る。
キーワードは 9 つだ。

①想像力　②学び/感じる　③再想像(re-framing)　④社会＝他社との関わり
⑤リアリズム/シニズム　⑥偽善　⑦理想から逃げる/理想へと逃げる　⑧ビジネスマインド
⑨越境を

「社会人になる上でもっていきたいもの」をテーマに行われた議論を進める中で、自分の弱みと強みを再認識することができ、自分の目指す人間像がより明確になった。
9 つのキーワードはどれもお互いに関係し合い、重要な意味を持つ。
その中でも、今後の自分にとって、自分の凝り固まった視点を崩し、自分にとっての新しい世界を見ることを助ける③再想像(re-framing)は大きな課題であり、意識していきたいことだと感じた。人間、生きていく上で経験と知識が付けば付くほど、それが自分にとっての自信となる。
そうした中でも初心に帰ることを忘れないようにしたい。
常に気持ちを新しく、自分におごることなく、たくさんのことを吸収し、大きく育ち続ける社会人になりたい。

2016/2/2
仁保　麗

塩原ゼミで得たもの

田代　静

—想像力の豊かなバランスのとれた人間になりたい。

これは、２年前に私が書いた「塩原良和研究会でどのように成長したいか」という文章の締めの言葉である。懐かしい。私は、他者に内在する本心や価値観を、私自身という媒体を通して、想像できるようなりたいと思っていた。この目標は達成できたのだろうか。

「想像力」とはなんだろうか。私は昔から、「想像力」という漠然とした言葉が好きだった。音楽を聴きながら、音楽に合わせて情景を想像しては楽しんでいた。海に行くと、海の底に住む魚の会話を思い浮かべたりした。この「想像力」の意味は、自分の内面から湧き出る「創造」に近い。しかし、４年間の大学生活で、この感覚のまま他者を想像することは非常に危険だということに気づかされた。勝手に他者を解釈すると互いに誤解を生み、より亀裂が入ることもある。

今年度何度も耳にした「想像力」はこれとは違う。「想像力」とは、共感や感性の限界を押し広げていく知的な努力だという。この考え方は、私の価値観に大きく影響し、人との関わり方について考えさせられるきっかけとなった。私が大学での時間を殆ど費やしたオーケストラでの活動にも、この想像力は欠かせなかった。本番前の数ヶ月に及ぶ練習の間に、自分では演奏し得ない楽器のことに対する理解を深め、何を成し遂げたいのか対話を繰り返すことで、本番の数十分間は他者の求める音楽を想像し想い繋ぐことができる。数十分間の想像を成功させるには、たくさんの時間をかけた対話や、努力によって得る知識が必要となるのだ。これは音楽に限ったことではない。「想像力」が豊かな人間というのは、何かと真剣に向き合う時間の蓄積なのかもしれない。

塩原ゼミでの２年間、当初の自分の理想通りにはいかなかったという印象が残る。十分に時間を生み出すことができない自分に、不甲斐なさを感じたりもした。その意味で「塩原良和研究会で」の目標達成とは至らなかったのかもしれない。しかし、想像力の鍵を得ることができた。前述の目標は、きっとこのまま人生の目標の一つとしてあり続けるのだと思う。塩原ゼミで得た想像力の鍵を、目標達成に向けて握り続けていきたい。

最後に、私は大学４年間を塩原ゼミ無しでは乗り切れなかった。
自身の精神面においても何度もゼミの存在に救われてきた。
塩原ゼミで得た価値観や過ごし時間は、私の大切な宝物である。

7期　板橋瑛美

Friends Project

鶴見の高校生とは、数回の交流ではあるが、彼らをみて改めて気づいたことがある。それは、経験や環境がその人を形づくるということである。彼らは「外国」人の親を持つかもしれないが、街ですれ違う日本人の高校生と何ら変わりない話し方をして、流行の遊びをする。

様々な国に住み、学校に通い、バックグラウンドの違う友達と遊び、その蓄積の中には自分が心地いい生活習慣や文化、考え方、価値観がある数だけ、合わないものもある。共感できる価値観や生き方は、全て同じ場所で得られたのではなく、生きていく過程の様々な段階で触れたもの・ことの組み合わせである。環境の変化が多ければ多い人ほど、その組み合わせも複雑になる。自分がしっくりくるものは、自分にしかわからない、相手に決めつけられる度に、自分の中にモヤモヤが増す。私自身のこのような経験があるから、「日本人」だから、「ブラジル人」だから、「ドイツ人」だから、という見方はされたくないし、自分自身も相手にしないようにしている。ただ、相手を深く知るためには、信頼関係を築くことが大切であり、それには時間がかかる。出会った全ての人に対して、長い時間をかけることは現実的に難しい。だからこそ、ここで、自然に「想像力」を働かせられるようになりたいと思う。それは、「色々な経験をしてきたのだろうな」、「環境の変化がたくさんあったのだろうな」という漠然とした想像をするだけでも、その後の相手との関わり方が大きく変わると感じる。

鶴見の高校生は、もしかしたら、日本社会に溶け込むために、無理して周りと同じになろうと努力しているのかもしれない。逆に、日本での生き方が今までの中で一番心地いいかもしれない。それは本人にしか感じられないことであるが、その過程も、全て意味があるのだな、と思う。この先、また多くの経験や環境の変化を通して、自分を表す組み合わせを探していってほしいと思ったのと同時に、私自身もその時々にあった心地いいものを見つけていきたいと思う。

FP 活動報告書

7 期 飯塚崇矩

高校生とともに河口湖へと行った夏合宿では、昨年のよる教室での学生たちとはまた異なる顔を見ることが出来た気がする。遠出をして自然と楽しそうに振る舞う高校生たちや、それに混じって遊ぶ大学生。中学生３年生を担当していた昨年は、あまりお互いに話しかけ合わない彼らにどう仲良くなってもらうのかが課題のひとつであったが、新高１を迎えた高校生たちはとても仲が良く、久しぶりに参加した私がどう混ざれるのかを不安に思う程だった。しかし、そんな不安も一瞬でかき消してしまう程に彼らはあたたかく私を受け入れてくれた。率先して料理の準備をする姿勢や、積極的にグループワークに参加する彼らの姿にはとても感心させられた。

正直、大学生は高校生をリードする役割があると思って臨んだ夏合宿であったが、全ての活動を通してあくまで私たちは高校生たちと対等な関係であるように感じた。そして、それが昨年の「受験合格」を目標に掲げたよる教室とは異なり、今年の「居場所作り」の目的に適うものであるとも感じた。もちろん、合宿やラウンジの場所などの「きっかけ」は塩原先生や大学生が提供するものであっても、居場所というのはどちらか一方の働きかけのみで作り上げられるものではなく、全員がともに作り上げていくものだということを肌身で体験することができた夏合宿であった。

一方で、初めて手持ち花火を体験した高校生や、ウクライナ風の BBQ を大学生たちが体験する等、多文化共生をテーマとする塩原ゼミならではの経験も多く出来た。

Friends Project 報告書

法学部政治学科 4 年　平野玲奈

初めてのことだらけだった高校生とのかかわりは、私にとって大きな刺激を与えてくれました。彼らとかかわったのは、後期の合宿の時でしたが、気が付いたら夢中で楽しんでいる自分がいました。去年からの知り合いの子だけではなく、新たな出会いもあり、友人が増えた感覚で私自身は楽しく過ごしていました。様々なアクティビティの中でも、ルーツを持つ国紹介プレゼンは、高校生たちとの距離を縮める良いきっかけになったと思います。プレゼンの準備を進める中で、高校生自身が自分自身の国についてよく興味を持っていること、また、有名な観光地だけではなく、政治経済についてもよく知っていることに驚いた記憶があります。事前に大学生が調べていた知識よりも、はるかに多くのことを教えてくれ、「高校生たちから見た国」を理解することができ、有意義な時間だったと思います。

Friends Project を経て、実際に高校生に会い、自分自身も変化を感じることができました。「外国にルーツをもつ子どもたちに対して何ができるだろう」と頭を悩ませる考え方から、何かを与えることを超えてお互いが少しずつ変わってゆく心地よさや、同時に難しさも学ぶことができました。私は決してたくさん参加できたわけではありませんでした。それでも、数回の中で気さくに話しかけてくれて、一緒に楽しい時間を過ごしてくれた高校生たちに、心から感謝しています。

FP 報告書

塩原ゼミ７期　田中瞳子

「フィールドワーク」「学習支援」「ボランティア」「居場所作りプロジェクト」…。わたしたちが行ってきた活動を表そうとするどの単語もわたしにはしっくりこない。

ただ一緒にトランプやおしゃべりをしていたことを「ワーク」と呼んでいいのか自信がないし、学習を「支援」した覚えもほとんどない。「ボランティア」という意識だったなら決して２年間通い続けてはいない気がするし、居場所を「作った」記憶もない。さらには「プロジェクト」という格好いい響きも似合わない。

そんな、徹底的に“効率の悪い”ラウンジでの時間は、わたしの心を時にぐちゃぐちゃにかき混ぜ、刺激し続けてくれた。

高校生たちのもつ「やわらかさ」。合宿や日々の会話を通して感じたことの一つだった。異なる国を理解しようとするとき、ついついしてしまいがちな「比較」。「日本と比べて～」「日本よりも～」というような物差しにわたしはよく頼ってしまう。しかし、衣食住すべてにおいて日本とは異なる国で生まれ育ったかれらが実に「やわらかく」母国と日本の文化を受け入れていることにハッとさせられた。比べることも批判することもせず、そのままに２国を受け入れている。真似をしようとしても案外難しい。頭でっかちな自分に嫌でも気付かされた。

「外国につながる高校生」。いつからか、かれらを表すこの枕詞をつい忘れてしまうようになった。外国につながるという「枠」を気にすることなくかれらと関わることができるようになったからだと嬉しさを感じる。そして同時に怖さも感じる。

かれらが「話したいこと・聞いてほしいこと」とわたしが「話してほしいこと」はイコールでないことの方が多い。常に全身を傾けて「見よう」「聴こう」としないと、かれらの抱える闇は決して見えない。

見えないからと、闇などないと思ってしまうことが怖い。そして、必ず闇があるはずだ。という目で最初からかれらと接してしまうことも怖い。そんな葛藤はいつも心のどこかにあるかもしれない。

鶴見での２年間にわたる活動をもうすぐ終えようとしている。

２年間コーディネーターとしてラウンジに関わってきた身から、これからの塩原ゼミ生に何か一つメッセージを残せるとしたら、「がんばらないでほしい」と伝えたい。何かと肩肘張って構えてしまうわたしに２年間かけてラウンジが教えてくれたことだ。がんばらなくていいから、ただかれらの側にいてほしい。それがあの場所がある意味であり、守り

続ける唯一の方法だと最近になってやっとわかってきた気がする。たくさん迷って悩んでぐちゃぐちゃになったら少し休んで、それでも会いに行き続けることが、わたしたちにできる唯一にして最大のことなのかもしれない。

　この２年間の楽しさと喜びと葛藤はすべて、「もっていきたいもの」リストに追加しておこうかな。
　塩原先生と、すべてに出会いに感謝を込めて。２年間ありがとうございました。

［つなげる］７期　鈴木脩大

今年度の FW を一言で総括しようと思った時、

不意に［つなげる］という言葉が浮かんできた。

しかしその単語に何か引っかかるものを感じ、

昨年度の報告書に自分が書き込んだ内容を見返してみた。

奇しくもそこには大きく一言、　　［つながる］と書いてあった。

［つながる］と［つなげる］。

昨年度は、子どもたちとの［つながり］を築き上げた。

そして今年度やってきたことは、１年間学んだことを次のステップへ［つなげる］ことだった。

その過程のなかでも、僕の中で様々な悩みがあり、様々な選択をした。

金曜日は市立川崎高校に通い続けた。

土曜日のよる教室には行かなくなった。

それらもひとつひとつの選択の結果だった。

特に何度も首をもたげたのは、「僕たちにできることはなんだろう」という疑問だった。

子どもたちにとって、毎日一緒にいる家族や友だちにしか話せないことや、

先生にしか解決できないことはあるはずだ。

でも僕たちは、週に１回彼らとほんの少しの時間を共にするだけの大学生だ。

親にも、先生にも、友だちにもなれない。

それでは、僕たちにできることはなんだろう。

答えは簡単だった。

僕たちにできることなんて、ほとんど何もない。

だからこそ、ほんの少しでもできることがあれば、

それが少しでも彼、彼女らにいい影響を与えられるよう必死で何でもやった。

もちろんそれが、本当に子どもたちのためになったのかどうかは解らない。

偽善は罪だと言う人がいる。

そして僕たちがやってきたこんなことも、所詮は偽善だと言う人がいるだろう。

僕が大切にしてきたのは、偽善をしている自分自身をしっかりと見つめることだ。

自分のしていることが本当は相手の立場を何も考えていない、自分のためだけの偽善だとわからずに

振る舞うことは、もっともみにくいことだと僕は考える。

たとえ偽善であろうとも、相手を幸せにすることで、自分も幸せになりたいと願う、そういううつくしい

アティチュードを僕は最後の最後に身にまとうことができるようになった気がする。

このうつくしい偽善のバトンをこの春塩原ゼミに入ってくる人たちに［つなげる］こと、

そのことこそ、去っていく僕たちがいちばん最後にやるべきことだと思っている。